

ヤマトシジミ ちょう — 一足元を飛び回る街の蝶 —

カタバミの花を訪れる

5月、暖かい晴れた日には散歩にでも出かけましょう。公園や街路樹の根元、川の土手などで、カタバミという小さな草を探してみましょう。

カタバミは、道端や公園、また庭の隅などにもっとも普通の背丈の低い雑草です。茎は地面をはって広がり、クローバーに似た葉、黄色い五弁の1cmほどの小さな花をつけます。花は5月頃から10月頃まで長い期間見られます。

カタバミがあるところには、たいてい、はねを広げてもせいぜい2.5cmほどの小さなルリ色の蝶がチラチラと飛び回っています。すこし様子を見てみましょう。黄色のカタバミの花にとまり、花の蜜を吸い始めました。吸い終わると次のカタバミの花へ。カタバミの花が好きなようです。

この蝶は、ヤマトシジミとよばれる蝶です。ヤマトシジミのオスの表側は青色で、はねのまわりに細かい黒の帯があります。裏側はうす茶色で黒の斑点があります。メスの表側は黒っぽく青色の範囲はほんの少しです。メスの表側はオスと変わりありません。



カタバミとヤマトシジミ



ヤマトシジミ・オス



はねの裏

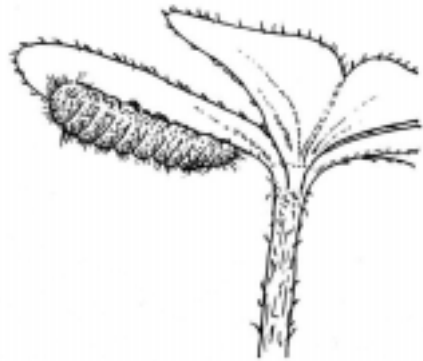
カタバミの葉を食べる

ヤマトシジミのオス・メスは、カタバミの上で出会い、交尾をします。交尾を終えたメスは、カタバミの葉の裏に一つずつ、直径1mmほどの白い小さな平らな丸い卵を産みつけます。

一週間ほどで幼虫がかえってきます。幼虫はカタバミの葉を食べて成長します。小さなうちは葉の裏から葉肉を食べ表皮を残します。それで、カタバミの葉を上から見ると白いすじが付いたように見えます。三回脱皮して1.5cmほどに大きくなった幼虫は、葉の端から丸ごとかじって食べるようになります。

この大きくなった幼虫には、アリがやってくるようになります。アリが幼虫をトントンとたたくと、ヤマトシジミの幼虫は、お尻の近くから液体を出します。この液体は、おそらく甘いのでしょう。アリは幼虫の出す液が目当てなのです。

やがて、幼虫はカタバミの葉の裏などでサナギになり、卵が産みつけられてから一ヶ月ばかりで、成虫が羽化してきます。こうしたサイクルを4月から10月のあいだに四回ほどくり返します。冬は幼虫ですごしますヤマトシジミはカタバミしか食べず、また、カタバミを食べる蝶は、日本ではヤマトシジミのみです。



ヤマトシジミの幼虫

街中でも見られる

このように、ヤマトシジミはカタバミとは切っても切れない関係にある蝶です。カタバミは、街の中でもごく普通に生えている雑草です。ですから、ヤマトシジミも街中でもよく見られる蝶なのです。

小さなあまり目立たない蝶で、高くは飛ばず地面近くを飛んでいるので、普段は気がつかないかもしれませんが、足元に注意をしていると、けっこう見つかります。もちろん、コンクリートとアスファルトでおおわれ、土がまったく無い所ではカタバミもヤマトシジミも見られません。街中でもいつまでもヤマトシジミが見られるようでありたいですね。

(根来 尚)



富山市科学文化センター

〒939-8084 富山市西中野町1-8-31 (TEL. 0764-91-2123)
<http://www.tsm.toyama.toyama.jp/>

平成11年5月1日